

VOICE.5

キャサリン・ハンター グリン・プリチャード マルチェロ・マーニ
普遍的な問題を映し出す『THE BEE』という鏡



photo: Dragos Dumitru

去年はニューヨーク、ロンドン、香港。
今年エルサレム(イスラエル)、ソウル(韓国)、シビウ(ルーマニア)と、ワールド・ツアーを行った『THE BEE』。
復讐の連鎖という普遍的なテーマを持つこの作品は、各地でどう受け止められたのか。
4人のキャストが、肌で感じた各地の反応を率直に語り合った。

これはわれわれの物語だ!

キャサリン 巡った国ごとに特徴があったわね。

マルチェロ それぞれアイデンティティーが強くて、カルチャーショックだったね。

野田 キャサリンが会った、エルサレムの散髪屋の話したら?

キャサリン あれね。井戸役を演じるために、日本のサラリーマン風の髪型にしようと思って散髪屋に入ったら、いの一番に「エルサレムは初めて? この街のことどう思う?」って聞かれたのよ。

マルチェロ ダイレクトだね。



「THE BEE」English version ワールドツアー 2013
photo: Maxim Reider

野田 エルサレムでは、いたるところで聞かれたよ、「この街、好き?」みたいに。

キャサリン 自分たちが外国でどのように受け止められているかに、彼らはすごく敏感なのよね。

エルサレムに着いた時に配られた情報バックにも「メディアによってわが国が好意的に報道されていないことは、私たちがたいへん意識しています。しかし、きっとこの国でよい時間を過ごされることと思います」云々と書いてあった。だから散髪屋さんの質問には、とりあえず失礼にならないように「旧市街の方に出かけましたが、ほんとに何か所に驚くべき量の歴史が詰まっている場所ですね」と答えたの。そしたら散髪屋さんが言うのよ、「そう、ユニークなところなんだよ。だからみんな来たがるんだけど、ここは俺たちの街だからね」って(笑)。そしてハサミの手を止めて「なぜエルサレムは自分たちのものか」を20分くらいかけて延々と説明するの。その後、私たちは『THE BEE』を上演しに来たという話になって、請われたのでストーリーを説明した

ら、彼はその内容にすごいショックを受けたみたいで、やっとのことで「なんともハッピーなストーリーだね」って言うと、外にたばこを吸いに行っちゃった。しばらくして戻ってくると、「それからどうなったんだい?」と尋ねるので、「どうなんでしょうねえ。両者とも、自分の指を切って送りつけあったかもしれないし……。とにかく、完全なる破滅的エンディングでしょうね」と答えたんだけど、彼は、このストーリーを自分たちの状況に重ねて理解していた。これはエルサレムで私たちが会った人すべてに、当てはまる反応だったわね。

野田 終演後に、イスラエルの役者達がやってきて、間髪を入れずに「これはわれわれの物語だ」って言うんだよね。

グリン 作品のメッセージが何であるか、彼らはみな瞬時に理解していたね。曖昧なところが微塵もないこのメッセージを。「これは私たちの話だ。私たちは毎日鉛筆を折っているんだ」と言っていた。

野田 そう、「われわれは折れた鉛筆を送りあっているんだ」と……。マルチェロ 演出家をしている僕の友人は、「とても直視できなかった、耐えがたかった」と言っていた。「まるで自分自身を見ているようで、痛みを感じた。それでも見続けたのは、その痛みがあまりに激しかったからだ」と。この作品は、最終的にはどちらがどうと決めることなく、あくまでひとつの疑問を提起する形で終わっている。そこは理解してくれたみたいだった。

キャサリン もうひとつ私たちが学んだのは、エルサレムの演劇状況のこと。2回公演なのに満席にならなかったことについて、現地の関係者がこう説明してくれた。エルサレムには、正統派ユダヤ教による保守的ユダヤ教教育の機関が多数あって、若い人たち向けの運動を展開しているそうなんだけど、彼らの重要な教典タルムードでは、演劇はあまりに「自由思想」寄り過ぎるとされているんですって。

マルチェロ 彼らは現状が変わらないことを望んでいるから、新しいものを歓迎しない傾向があるんだね。

野田 「なぜ公演場所をテルアビブにしなかったんだ」って聞かれたよ。

キャサリン 私たちが会った演劇関係者は、ほとんどテルアビブに拠点を置く人たちだったのね。若い文化の中心地は、テルアビブなんだと。マルチェロ イスラエルをツアーに選んだ時に、エルサレムはあまり外部からの因子を歓迎しないと聞いたので、じゃあ敢えて行くことが重要だろう、ということになったんだよね。そういうところで波紋を拡げてみたかったから。

グリン 僕はそもそも、エルサレムで上演するという考えに、疑問を呈した方だった。知り合いの中には、イスラエルは文化的にも経済的にも、国際的に排除されるべきだ、と考える人もいるからね。実際、イスラエルからの招待をボイコットした演劇人もいた。僕も、別にミュージカルとかだったら問題にはしなかったと思うけれど、今回は作品が作品だからさ。

野田 でも、そうやってみんながボイコットすると、北朝鮮のように孤立してしまうと思うんだよ。マルチェロ そういう圧力下では、かえって意固地になって凝り固まってしまうがちだからね。

イスラエルが強力な軍事力を有しているのも、そんな彼らの恐怖心の裏返しでしょう。キャサリン その意味でも、今度イスラエルに公演しに行くなら、パレスチナ自治区にも行けるといいわね。

マルチェロ・グリン・野田 賛成!

鏡に映った自分の姿と認められるか否か

キャサリン エルサレムでは「自分たちのストーリー」として受け取られたのに対して、韓国のソウルや香港では「いかにも日本の話だね」って言われることが多かったわね。

野田 「どういところか?」と聞くと、「そうだねえ、復讐するところとか」なんて言われた(笑)。

マルチェロ それと、西洋だと暴力的な場面はそうなる手前でやめる傾向があるけど、日本はそういう場面をとことんやる、という印象があるのかもしれないね。西洋の場合は、そういったところは、かしょぶって見せようとしなから。西洋人は、自分たちが戦争を起こしてきたという歴史を忘れてるのかもしれない。

野田 西洋の拷問の歴史なんて、ひどいものなのに。

グリン 拷問どころの話じゃないよ、もう(笑)。

マルチェロ でも、それは今の自分とは無縁だと思ってるわけだよ。

キャサリン もちろんソウルや香港も、みんながみんな、同じ反応だったわけじゃないけど。

野田 そう。「われわれの話だ」って言ってきたお客さんもいたよ。『われわれ』というのは、主に「世界中のみんな」という意味だったりしたけど。

マルチェロ シビウのお客さんは、熱狂的だったね。英語もちゃんと理解しているようだったし。

野田 終わって拍手する間もなく、走って出て行く人が多いのが特徴かな。

グリン そうだね。次の公演会場に、急いで移動しなきゃならないから(笑)。

野田 イスラエルは、エルサレムやテルアビブだけでなく、パレスチナ自治区でもぜひやりたいけど、もうひとつ、去年のニューヨーク公演は、場所がジャパン・ソサエティという、そもそも日本文化びいきのお客さんが多いところだったでしょう。日本文化=伝統芸能というらえ方は、

以前と比べればだいぶ薄らいではいるけど、やはりイメージは根強いと思う。だから今度チャンスがあったら、別の劇場でもやってみたいんだよね。

グリン キモノとか日本刀とか(と、時代劇のマネをしながら)、エキゾチックな日本のイメージを期待するのは、西洋側の問題でもあるんだよね。

マルチェロ そういう魅力だけで西洋側が日本の作品を呼びたがる、と秀樹は言うようにしているんだらうけど、ほかにも理由はあると思うんだよ。招聘側は、作品選びをする際に「これは日本固有の問題」と、内容が日本に限定されたものと断じる傾向があるんだ。でも、この作品については、それでは通らなかつた。「いや、これは全世界共通の問題です」と、眼前に突きつけてくるものがあるからね。どの国の観客も、舞台という鏡に映し出された自分たちの姿を見てしまう。そういう仕組みになっている作品だからね、『THE BEE』は。

通訳:野田 学
取材・構成:伊達なつめ

※この座談会は、次号にて編纂掲載予定です。

今回のアイタイヒト

KATHRYN HUNTER
キャサリン・ハンター 英国王立演劇アカデミー(RADA)で学び、コンプリシテなどのフィジカルシアターからロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(RSC)まで、さまざまなスタイルの演劇に、老若男女あらゆる役柄で登場して圧倒する、ユニークな名優。野田作品には『THE BEE』と『THE DIVER』で主演している。

GLYN PRITCHARD
グリン・プリチャード ロンドン・リジェントパーク・オープン・エア・シアターで初舞台を踏み、以後ロンドンのナショナルシアターやキャサリン・ハンター演出の『オセロ』(RSC)など、多くの舞台・映像で活躍している。フィジカル・シアター出身ではないが抜群の身体能力を持ち、野田作品では『THE BEE』『THE DIVER』に出演。

MARCELLO MAGNI
マルチェロ・マーニ パリのジャック・ルコック国際演劇学校で学び、サイモン・マクバーニーらとテアトル・コンプリシテを設立。フィジカル・シアターの第一人者としてさまざまな舞台に出演するほか、演出家としても活躍。来年2月に東京芸術劇場で『隣子の国のティンカーベル』(野田秀樹作)を演出予定。野田作品は『赤鬼』英国版、『THE BEE』などに出演。

野田秀樹 HIDEKI NODA
のだ・ひでき 劇作家、演出家、役者。1955年、長崎県出身。大学在学中に劇団夢の遊戯社結成。一大ブームを巻き起こし92年に解散。ロンドン留学を経て93年、NODA・MAPを設立。国内のみならず海外でも積極的に作品を発表。09年、東京芸術劇場の芸術監督に就任。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科教授。

10月4日(金)~11月24日(日) NODA-MAP 第18回公演『MIWA』
東京芸術劇場プレイハウスにて。その後、大阪、北九州にも巡回。
www.nodamap.com/